『にごりえ』の道行（一）

浅野　洋

一

『にごりえ』の終幕（八）は、「魂祭り」を過ぎた数日後、「新開の町」を出てゆく二種の棺を眺めて「ひそめく」人々の〈噂〉が大半を占める。棺には酌婦のお力とその馴染みだった源七の亡骸がそれぞれ収まっている。源七の手になる心中が「無理心中か、合意心中か」の問いは「無用の詮索」とする前田愛（注1）は「肝腎なのは、二人の死体が、冷やかな第三者の噂話によって葬送されたという事実だ」と指摘する。現に、最後の一節も「諸説みだれて取止めたる事」のない〈噂〉が飛び交うなか、「人魂か何か」が「折ふし飛べるを見し者ありと伝へぬ」との〈伝聞〉で結ばれている。〈伝聞〉もまた出所不明の漠たる〈噂〉の一種であり、終章は確かに〈噂〉のヴェールで包まれている。

上掲の結末について、前田氏はさらに次のように述べている。

お力と源七は近松の『曽根崎心中』や『心中天網島』の恋人たちとはうらはらに、彼岸の救済を約束されているわけでもなく、生き残った者たちの鎮魂の対象ですらない（江戸時代の都市住民を結びつけていた共同体の論理にかわってあらわれた近代都市の冷酷な実態である）。死者の霊を生者の世界へと迎えとる盆提灯がまだ軒先に灯っている季節に、お力と源七がこのような死の手にとらえられてしまうところに、『にごりえ』のもっとも深いアイロニーがある。

「深いアイロニー」は、顔の見えない無責任な〈噂〉を語る人々が、葬送にもかかわらず、死者を悼む心とは無縁の連中だったことにも色濃い。二人の死は、その〈噂〉が霧散すればすぐ消えてしまう泡沫のような三面記事の一つにすぎない。

この終章については、早く「雲中語（注2）」が『にごりえ』の「技巧」が未熟な例として「第八章を以て直に第七章の後を承け草々局を収めたるは、権衡宜きを得ず」と評して以来、急場しのぎの幕引とする見方もある。だが、重要なのは、物語構成のバランス

（権衡）ではなく、読者の意表をつく二人の突然の死とそれを取り巻く周囲の反応の方なのだ。一見唐突に見える二人の〈心中〉と野次馬たちの物見高さや冷淡さを同時に語るには〈噂の話法〉ほど適切な描写はなく、二人の死の哀れさをより際立たせる秀抜な方策といってよい。『にごりえ』の特徴のひとつは、この〈噂〉をはじめ、さまざまな〈間接話法〉が巧みに駆使された点にある。

前述した終章の〈噂〉をはじめ、次に述べる冒頭のお高の発言や結城朝之助の存在など、『にごりえ』では物語の内実を直叙する描写に代わって間接的な話法が用いられる。たとえば、冒頭（一）におけるお高の発言は、めったに本心をもらさぬお力の内心を代弁し、大っぴらにできない源七との関係を当事者以外の口であぶりだす仕掛けになっている。それは物語の〈核心〉がお力と源七の厄介な関係にあることをいち早く読者に告知するための〈間接話法〉である。次に、結城朝之助は源七以外でお力に親しむ唯一の登場人物で、彼の言動はいかにも意味深長にみえる。だが、実態は「単にお力の素懐を吐かしめんための器具」[注3]や「フランス古典劇にいう聞き役（コンフィダン）」（前田氏）と評されるようにお力の言葉の引き出し役で、本質的にはお力の孤独や痼疾を共有できない門外漢である。だが、二人のこの〈溝〉＝ディスコミュニケーション[注4]こそ他者には理解しがたいお力の孤独な内心を物語る言質なのだ。

こうした間接的な話法は、とくにお力自身の内心の描写において顕著である。お力は、物語のほぼ全編を通じて源七の存在を脳裏に思い浮かべるが、それは言葉や顔には現れない。彼女の内心や本音は直叙されず、微妙な態度や反語や沈黙など、総じてそっけない反応を通じて〈間接的〉に語られる。以下、そうした例を具体的に確認しておこう。ただし、お力の登場しない源七宅の場面である第四章と第七章は除く。

二

たとえば第一章で、お高が語る「彼の人」（私見では源七。理由は後述）からの長大な手紙に対し、お力はそっけない反応で無関心を装う。だが、末尾でお高が「兎も角手紙をやって御覧、源さんも可愛さうだわな」と語ると、お力は「煙管掃除に余念のなきか俯向たるまゝ物いはず」となる。煙管掃除にかこつけたお力の〈沈黙〉は、源七の名を出されてあらためて彼との厄介な関係を思いやる彼女の複雑な心情を物語っている。

第二章では、お力はこの界隈に珍しい「山高帽子」の上客（結城）への対応に忙しく、源七どころではない。だが、男は「相手のいない事はあるまい、今店先で誰やらがよろしく言ふたと他の女が言伝（ことづて）たでは無いか」と迫り、「此娘の可愛い人は何といふ名だ」と朋輩を問いつめる。お力は「寄る辺なき風情」で黙りこむが、自身の「可愛い人」を追求されては、いやでも源七の姿を思

い浮かべざるを得なかったろう。

第三章は、朋輩の一人が結城との睦まじい容子を「弄かひ」半分に「源さんが聞たら」「気違ひになるかも知れないとて冷評す」。ここでもお力は無言だが、その冷やかしは結城に熱を上げ始めた彼女の心に源七の存在を突きつける冷や水であったろう。また、「或る月の夜」、職工たちの騒ぎをよそに二人は二階で差し向かいとなるが、下座敷から盃盤を運んできた女がお力に「耳打ち」した話を「聞すまし」た結城が「可愛い人を素戻しもひどからう」と言うと、彼女はその人物が「久しい馴染」の「蒲団やの源七」だと告白する。重要なのはその後段で、表を見下ろしたお力が「あゝ最う帰つたと見えますとて茫然として居るに、持病といふのは夫れかと切込まれて、まあ其様な処でござんせう（中略）と薄淋しく笑つて居る」（傍点筆者。以下同じ）。お力の「茫然として居る」様子は、面会が叶わず悄然と踵を返しただろう源七を思っての反応で、逢えば色々面倒で「寄らず障らず帰した方が好い」と口先でこそ割り切って見せるものの、内心では源七への複雑な思いを引きずっていることを物語る。また、「持病」の原因を源七と認めたお力が「薄淋しく笑」うのは、落魄した男との腐れ縁を断てない優柔不断な自身への憫笑だろう。さらに、お力を「鬼」と呼ぶ太吉の姿を遠目に見ての「堪へかねたる様子」は、源七との因果な関係が子供にまで及ぼす不幸への自責の念を物語る。つまり、お力の内心は直叙されないが、源七への思いは間断なく〈間接話法〉で語られ続けている。

第五章、盆の十六日、お店者の宴席に出ていたお力は「我恋は細谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねばと謳ひかけしが、何をか思ひ出したやうに」その場を飛び出す。唄の続きを思い浮かべたお力は「矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい」と呟き、父祖の人生を想いつつ「幾代もの恨みを背負うて出た私なれば為る丈の事はしなければ死んでも死なれぬ」と考える。このお力の「丸木橋をば渡」る決断とはどのようなものか。直後の述懐に「菊の井のお力を通してゆかう」とある以上、酌婦の継続は明白だが、単なる現状の継続では「丸木橋を渡」る深刻な決断とはいえまい。おそらくお力は現状の継続が〈死の危険〉を伴うことを予感しており、その危険をも承知の上で現状の継続を決めたこと、それが彼女の「丸木橋をば渡」る決断だったと思われる。現状を継続すれば源七のつきまといも続くわけで、思いつめた彼がいつ暴発するか知れぬ、その〈危険〉をもあえて甘受するという覚悟である。つまり、お力の「丸木橋をば渡」る決断にも源七の影が色濃い。

第六章は、第五章と同日の夜で、お力が結城に身の上話を吐露し、二人は結ばれる。彼女は「うつとり」と彼の顔をながめ、「今夜は残らず言ひまする」と述べ、祖父も父も自殺した「三代伝はつての出来そこね」の血筋や、極貧の七歳の冬に体験した哀しい思い出を語り、その頃から「気が狂つた」という過去を真剣

に語る。こうした状況では源七の存在など想起されそうになく、現に彼の話題も出てこない。だが、お力は身の上話を語る前に「今夜は私に少し面白くない事があつて気が変つて居まするほどに其気で附合て下され」との断りを入れている。第六章には「面白くない事」に相当する記述はないので、同日の前半にあたる第五章を見るしかない。現実との疎隔を体感する異常心理を描いた印象的な場面は「面白くない事」に該当しないので、先述の、思い悩んだ末に源七との危うい関係をはらむ現状を継続するしかないと決断したこと、その〈苦い自覚〉がお力の「面白くない事」なのではあるまいか。つまり、身の上話の吐露にもやはり源七の影が落ちている。

終幕の第八章は、思いつめた源七が、お力と自身の命を奪ったあとの後日談で、その哀しい愛執の炎は成仏できず、「人魂」となって宙をさまよう。この場面では〈心中〉という事実が重要で、二人の存在は周囲の〈噂〉という間接話法の波間に没してゆく。

見てきたように、お力は源七への思いを直接語りはしないが、脳裏には常に源七の存在が去来し、彼を思う複雑な心情が物語全体に底流している。つまり、『にごりえ』の〈核心〉はまぎれもなくお力と源七、二人の関係にあるはずだが、近年、どういうわけか〈第三の男〉の存在が取り沙汰され、注目されている。

三

『にごりえ』は、上述のように間接的な話法で語られ、その行文には省筆や暗示的な表現も多く、「雲中語」が「読者の忖度に任せたる区域の余りに広すぎしこと争ふべからず」[注5]と評したように読者の読みに委ねる不明瞭な箇所や空白も少なくない。現に「『たけくらべ』『にごりえ』―テクストの〈空白〉をめぐって―」と題する座談会[注6]をはじめ、議論が重ねられてきたが、すべてに明解な結論を得たわけではない。そのため読みの分かれる箇所がいくつかあり、その一例が次に掲げる巻頭近くの一節なのだ。その読みが作品全体の読みをも左右するとされるのでやや長い引用となるが、一節全体を見直しておこう。

『にごりえ』はまず、店先で客を引く酌婦お高の呼びかけに始まり、商売の不調を嘆く彼女の愚痴や朋輩お力の様子などをスケッチしたあと、次のように続く。

お高といへるは（中略）思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと気のない返事をして、どうで来るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つて居るに、大底におしよ巻紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出来る物かな、そして彼の人は赤坂以来の馴染ではないか、少しやそつとの紛雑があらうとも縁切れになつて溜る物か、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を

出して取止めるやうに心がけたら宜かろ、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切有りがたう、御異見は承り置きまして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだのと笑ってお前などは其我がまゝが通るから豪勢さ、此身になっては仕方がないと団扇を取って足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄ってお出で。と夕ぐれの店先にぎはひぬ。（一）

ここはお高とお力の会話が中心で、背景の説明が乏しいため、内実は必ずしも明瞭ではない。たとえば、上掲引用中、「巻紙二尋」の「二枚切手の大封じ」とある長大な手紙は誰が誰に宛てて書いた手紙なのか、また、固有名の不明な「彼の人」とは具体的に誰をさすのかなど、その読みが揺れている。従来は、前者を〈お力が源七宛てに書いた手紙〉とし、後者は〈源七その人〉をさす、とする見解が多かった。ところが、これに対し、戸松泉[注7]と出原隆俊[注8]両氏が異を唱え、従来の読みを強く否定した。その影響は以後の『にごりえ』論にも及び、たとえば山本欣司[注9]氏はこれらをうけて『『先刻の手紙』とは、お力が源七に宛てて書いた手紙、もしくは源七がお力に宛てて書いた手紙」と読むのは「硬直した解釈」であり、次に見る戸松氏の問題提起が滝藤満義[注10]氏や出原氏らの追認によって「定説化するのも当然」とし、後掲の出原論を「首肯すべき見解」とする。だが、果たしてそうか。まずは戸松氏の見解から見てみよう。

この「長大な」手紙は、お力からいわゆる「宜いお客」に宛てた手練手管の「お愛想」の手紙である。このお客は「赤坂以来の馴染」で、お力のところに足繁く通っていたものの、なにかお力との間に「紛雑」があって、近ごろ足が遠退いたものと思われる。お力は、そうしたお客に対して、朋輩のお高の前では、「虫が好かない」「無き縁」になっても構わないとそっけない態度を示し、不興を買うが、その実、裏では長い手紙を書いて、上客をしっかり取り留めようとしているのである。

戸松氏は、「先刻の手紙」をお力が（源七とは別人の）「赤坂以来の馴染」の「宜いお客」に宛てた手紙とし、それは「上客をしっかり取り留め」るための手段だと解する。だが、お力はそもそも営業目的で長大な手紙を書くような人物なのか、その人物形象を一瞥してみよう。お力には（お高らにはない）客を呼ぶ「技倆」があり、容姿が朋輩よりもひときわ優れた「此家の一枚看板」で、「年は随一若けれども客を呼ぶに妙あ」るため「我がまゝが通る」「豪勢」な存在とされる。それゆえお高はお力に「ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜かろ」と気ままな商売ぶりをやっかみ半分に咎める。そんなお力がお高らの眼を盗んで「裏では長い手紙を書」くはずもなく、お高のお力への咎めだてとも大きく矛盾する。問題の手紙もお高から話題にして

おり、「裏」の営業活動などではない。「気位が高い」上に「思ひ切りが宜すぎる」お力の気っぷからすれば、たとえ上客でも、わざわざ「勢を出して」「巻紙二尋」に及ぶ「取り留め」の手紙を書くとは思えない。第一、朋輩の眼を盗んで「裏で」営業に走るいじましい商売根性は、存外「やさしい処」があって朋輩を魅きつけ、その「心」を映す「面ざしが」「冴へて見へる」お力の「本性」（一）にそぐわず、彼女の一見豪胆な（実は沈鬱な）個性とも大きく背反する。

「二枚切手の大封じ」が、もし上客引き留めの営業手段ならば、「巻紙二尋」に及ぶくだくだしさは返って逆効果だろうし、無粋な長文は迷惑でもある。一般に手紙が長くなるのは、叶わぬ思いを何とかしたいと願う切なる訴え、その思いのたけを縷々述べる場合などであろう。かつて何か「紛雑」があったうえに今や落魄し、店への出入りやお力との面会もままならぬ源七にとって、逢瀬を願う手段は手紙だけである。お力に対する源七のそんな切ない思いがつい「巻紙二尋」の長文になったと思われる。その長大な手紙を「お愛想で出来る物かな」と語るお高の発言も、お力の営業ぶりに対するまぜっかえしではなく、よそながら二人の事情を知るお高が源七の真剣さにほだされての発言であろう。このように見てくると、「二枚切手の大封じ」は、〈源七がお力に宛てた手紙〉以外には考えられず、ましてや〈お力が上客に宛てた手紙〉などでは決してない。

しかし、上述のように読むと、引用冒頭のお高の発言「力ちゃん先刻の手紙お出しか」が問題となる。これを文字通り読むと〈力ちゃん、先刻書いた手紙を投函したかい？〉となり、私見と矛盾する。しかし、ここは関礼子[注1]も述べるように「力ちゃん、先刻の手紙［返事の］をお出しか」の略もしくは脱と考える。なぜなら、「お出しか」以後のお高とお力の対話が〈源七からお力にきた来信〉をめぐる話題としか読めないからだ。たとえば、先のお高の問いに対し、お力は「はあと気のない返事をし」、「どうでくるのでは無いけれど」と応じる。「先刻の手紙」が上客を引き留めるための手紙なら、長文に「精を出した」労力に比してお力の反応はあまりに薄すぎる。他方、それが源七からの手紙であれば、これまでのいきさつからお力にはくだくだしい内容が十分すぎるほど予測できたわけで「はあと気のない返事」となり、〈どうせ店に上がれる現状でもないのに〉と嘆息するのもうなずける。続くお力の「あれもお愛想さ」の発言も〈あんな大層な手紙も皆のお笑い種になるだけさ〉というほどの意味だろう。こうしたお力の一見なげやりな反応に対し、源七の気持ちを知るお高は「巻紙二尋」の長文が「お愛想」つまり〈軽々しい浮ついた気持ちで書けるものか〉と反論し、かぶせて「そして彼の人は赤坂以来の馴染ではないか」と、薄情そうに見えるお力の反応をなじるのだ。この流れを見れば、「赤坂以来の馴染」の「彼の人」を、源七とは別人の「上客」と読むのは到底困難である。

四

戸松論には言及していないが、出原氏も「源七ではない〈彼の人〉という《第三の男》の《出現》を強調し、「彼の人」を源七とする読みを「誤読」と断じた。私見は戸松論への反論にほぼ尽きているが、出原氏の見解にも耳を傾けてみよう。

出原氏は、菊の井のある「町内」と「赤坂」の二つの地域を検討し、源七とお力の居住地が同じ町内で、二人の関係を「赤坂以来」とするのは困難と見る。とくに源七は転居はしたものの「ずっとこの土地〈菊の井と同じ町内〉にいた」と述べ、「だとすると、二人の関係はお力が赤坂にいて源七がそこに通ったと考えるしかない」が、「何よりも『(菊の井のような)此様な店で身上はたはた』(三)いたというように、お力と源七の濃密な関係はこの町で展開された」とする。それゆえ「馴染の深さを『赤坂以来』と朋輩が表現することはない」ので「赤坂以来」が「源七とお力の関係をさすとは考えられない」とする。だが、「朋輩」のお高は現に「先刻の(源七からの)手紙」に関連して「赤坂以来の馴染ではないか」と語っている。源七の居住地は確かに「町内」に限定できるが、お力の場合は確証がなく、酌婦に身を落とすまでにはあちこち流れたと見るのが自然だろう。まして知己の多い生まれ育った町内で酌婦になるなど考えにくく、「お力が赤坂にいて源七がそこに通った」状況を〈居住地〉の観点から否定するのは無理である。氏は「此様な店(菊の井)で身上をはたく(ほどの男)」という表現が二人の関係を「町内」に限定できる決定的根拠とするが、「身上をはたく」が残余の資産を使い果たす最終局面を意味するなら、源七の〈零落〉の始まりが以前の「赤坂」であっても何の問題もない。加えて二人の出会いが「町内」の菊の井だという明確な記述もない。ちなみにお力の有力なモデルとされる酌婦も元は赤坂に居たとされ[注12]、「洗ひ紙の大嶋田に新わらのさわやかさ」(一)というお力の姿が「もと赤坂芸者」の証左だとする指摘[注13]もある。もともと遊びなれぬ初心な(お力に執着し続ける一途な)源七が赤坂芸者の姿にのぼせ上がり、銘酒屋の酌婦に転じた今も〈昔の夢〉を追い続け、なけなしの財産を蕩尽した(身上をはたいた)と考えても不思議ではない。また、先述のごとく、長大な手紙が源七からの来信だからこそお力は素っ気なく、彼の心情を知るお高の方がかえって深く同情し、駄目を押すように「そして彼の人は赤坂以来の馴染ではないか」とお力をなじるのだ。この流れは動かしがたく「彼の人」を源七以外の《第三の男》とみなすのは無理である。氏はまた、菊の井の「初めから(中略)源七の家のことをお力が知って」いるのは、二人が同じ町内の住人だったからとするが、これも「久しい馴染」(三)であれば互いの身辺を語り合う夜もあったはずで、お力が同じ町内の住人だったことの根拠にはならない。

さらに問題の「先刻の手紙」に関連して出原氏は次のように述

べる。

源七への手紙については、第一章の終わり近くに「手紙をお書き今に三河やの御用聞きが来るだろうからあの子僧に使ひやさんを為せるが宜い」という朋輩の言葉があり、まだ書かれていないのである。「（中略）兎も角手紙をやって御覧、源さんも可愛さうだわな」というのも、手紙を書かせようとする勧めに過ぎない。できあがったものを届けるようにと促すのではない。「二枚切手」と「使ひやさん」というように、手紙の送りかたもはっきりと違っている。（中略）もしも、〈彼の人〉を源七とするつもりであるなら（中略）同一人物宛に同時に二種の手紙を作成させてしまうというミスを犯したということになろう。

「同一人物宛に同時に二種の手紙を作成させ」る「ミス」とは、出原氏が「先刻」の「二枚切手」を〈お力が源七に宛てた手紙〉とする従来の〈誤読〉を前提とするからで、私見のごとく〈源七がお力に宛てた手紙〉とすると「同一人物宛に同時に二種の手紙を作成」する「ミス」にはならない。戸松氏への反論でも述べたが、営業目的の長文の手紙はお力の個性にそぐわないし、お高の「ちつとは精を出して取止めるやうに」との咎めだてとも矛盾する。続く二人の一連の対話も源七からの来信をめぐる話題としか読めない。第一章後半でお高が源七宛てに「手紙をお書き」と勧めるのは、思いのたけを綴った彼の長文の手紙に対し〈せめて返事を出しておあげ〉との意味だろう。現にこの発言の前にはお高の「私は身につまされて源さんの事が思はれる」との言葉があり、「兎も角手紙をやって御覧」の直後にも「源さんも可愛さうだわな」という同情の言葉が続く。物語は冒頭から二人の関係を軸としており、ここに源七以外の《第三の男》が割り込む余地などまったくない。

それではなぜ、お高は「彼の人」という曖昧な呼称を用いたのか。その答は、ほかならぬ出原氏自身の次の言及の中にある。

〈彼の人〉への手紙に係わる話は「表を通る男を見かけて寄ってお出でと夕ぐれの店先にぎはひぬ」で閉じられている。そして、少し時間の経過をおいて「お高は往来の人なきを見て」と、源七への手紙のことが話題に上るのである。つまり、前の手紙の存在があってこそ源七への手紙のことが浮かんだのである。作者はむしろ〈彼の人〉に対置して源七という人間をお力に意識させようとしているのである。

冒頭近くでお高が「彼の人」に言及するのは客引きに忙しい「夕ぐれの店先にぎはひぬ」時刻であった。一方、お高が「源七」宛ての手紙（返事）を勧めるのは「少し時間の経過をおいて」「往来の人なきを見て」からだが、その際もお力は「気をつけてお呉れ店先で言はれると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手伝ひを情夫（まぶ）に持つなどゝ考違（かんちが）へをされてもならない」と警戒する。冒頭で「彼の人」と称する理由はこの〈警戒〉に明

白だ。つまり、人通りの多い夕暮れ時では自分たちの会話がいつお客の耳に触れて噂が立たないともかぎらない。商売柄から特定の男（情夫）の話は禁物で、具体名を出すなどもってのほかである。そんな事情を同じ酌婦仲間のお高も十分に承知していればこそ、わざと「彼の人」とボカして話をふったのである。のちに「往来の人なきを見て」気のゆるんだお高が「源七」の名を口にした時も、お力は「気をつけてお呉れ」「人聞きが悪いではないか」と、なお用心深く「源七」の名が出ることを警戒している。「作者」は、「〈彼の人〉に対置して源七という人間」を設定したのではなく、源七をわざと「彼の人」とボカす呼称を用いることで、酌婦たちの商売上の事情やお力と源七の関係を間接的に語り、人通りの多い夕方と少ない夜との状況の違いを巧みに描出したのである。二人の対話が隠約の間に語るこうした〈間接話法〉こそ『にごりえ』の肝要な特質なのだ。そこから大きく乖離した戸松・出原両氏の読みは筋違いの曲解であり、それに同調する滝藤氏や山本氏らの見解も「誤読」というしかない。

五

『にごりえ』の後半が「盆の七月十六日から数日間」であることに注目し、「盆提燈のかげが支配する死の世界」の意味を論じた前田氏は、「お力は何故七月十六日の夜、結城にむかって身の上を打ち明けたのか」と問い、次のように述べる。

> お力の身の上話はたんに彼女の「履歴」だけではなく、父や祖父の生き方と切り離すことができない宿縁の物語であった。お力じしんの生は死者たちの幻影に二重三重にからめとられている。お力がその身の上を語り始めるにあたっては、死者たちの世界に参入する何かのきっかけが必要であった。とすれば死者たちの精霊が年に一度この世に帰還する盂蘭盆こそ、お力の告白を促す契機でなければならない。

お力が「盂蘭盆」の日に告白する契機を解いたこの指摘は『にごりえ』の要所を的確につくものだが、さらにもう一歩踏み込む理由は考えられないか。たとえば、盂蘭盆の日より一カ月ほど前[注14]、第三章の前半で結城が「履歴」を問うと、お力は「言はれませぬ」と拒絶する。続いてお力の「持病」や「逆上性（のぼせ）」などが話題となったあと、問題の「可愛い人」が「久しい馴染」の「蒲団やの源七」と明かす（三）。情夫の名まで明かしたお力がなぜ「履歴」の告白を頑なに拒み、七月十六日まで待たせるのか。

見てきたようにお力の脳裏には常に源七の存在があり、内心にはその屈託が渦巻いている。お力には源七が思いつめて遠からず〈心中〉に走るとの予感があり、そうなれば彼女も死者の列に加わることになる。それゆえ、人生を振り返って総括する身の上話の「告白」は、自身の死を覚悟するのにふさわしい、死者の霊も帰る「盂蘭盆」当日だと決めていたのではあるまいか。というの

も、お力には早くから自身の死を予期していたふしがある。たとえば、結城との初対面の別れ際、お力が次回の来店を勧め、結城が「空誓文は御免だ」と返すと、彼女は「菊の井のお力は鋳型に入つた女ではござんせぬ、又形のかはる事もありまする」（二）と答える。のちにお力は結城に対し「私に思ふ事があるだらうと察して下さるから嬉しい」と言いつつも「よもや私が何を思ふか、夫れこそはお分りに成りますまい」（三）と語るように、この「形のかはる事」は、結城の予想もできない極端な変容、すなわち単なる外見や境遇の変化ではなく、変わり果てた姿＝死者になることを暗示するものと考えられる。また、結城との仲を「源さんが聞たら」「気違ひになるかも」との冷やかしは、源七の内なる激情が〈心中〉に走る危険性を示唆し、彼を「素もどし」したあとのお力の言葉「恨まれるのは覚悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござります」（三）も「恨」みから自身が悲惨な最期を迎える予告ととれる。このようにお力が常に自身の死を避けがたい運命に感じていたとすれば、その覚悟を明確にすべき日をも定めていた可能性が高い。お力が身の上話の「告白」を「盂蘭盆」当日に決めたのは、自身も〈死者の列〉に加わる最終的な覚悟を決断する日だからではあるまいか。現に、二人の〈心中〉はお力が死を決意した盂蘭盆の日から数日後に決行される。

もう一カ所、『にごりえ』を特徴づけている印象的な場面がある。第五章で酒宴の場を飛び出したお力が「丸木橋をわた」る決断をしたあと、「何うしたなら人の声も聞えない、物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうつとして、物思ひのない処へ行かれるであらう」と思い悩み、「気違ひじみた、我身ながら分らぬ」まま「夜店の並ぶにぎやかなる小路」をさまよい歩く、そのあとの場面である。

行きかよふ人の顔小さく〳〵、擦れ違ふ人の顔さへも遥とほくに見るやうに思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がや〳〵といふ声は聞ゆれど、井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の声は、人の声、我が考へは考へ、と別々に成りて、更に何事にも気のまぎれる物なく、人立おびたゞしき夫婦あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは広野の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、気にかゝる景色にも覚えぬは、我れながら酷く逆上せて人心のないのにと覚束なく、気が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力、何処へ行く。とて（五）

前田氏は、この場面を「お力の眼に映じた外空間の変質、生の場面の輪郭喪失を指し示」すもので、お力を取り巻く「外空間と彼女じしんの内空間との隔絶が確認される」とした上で、この描写が「精神病理学にいう離人症の症候と符合するところが多い」が、ここから「お力を、精神病者として規定することは誤り」で「過労による一過性の神経症的症候」とする。おおむね首肯すべき見解だが、お力のこの状態を「過労による一過性の神経症的症

候」といった精神面だけで見ることにはやや疑問も残る。ここには〈濁り水〉の下層社会に沈んだまま、けっして視界の〈澄む〉こと（将来への見通し）のないお力の境遇をも加味すべきだろう。前田氏は、この精神状態をお力の「持病」や一葉の身体症状に通じるものとするが、この「症候」は、端的にいえば〈濁り水〉の中にある状態がもたらす閉塞感の症候ではあるまいか。すなわち、死をも覚悟しつつ、酌婦として「菊の井のお力を通してゆ」くしかない状況、その緊張や息苦しさが限界を超えて生理的な平衡感覚を狂わせ、現実世界との距離感を失わせたと考えられる。「擦れ違ふ人の顔さへも遥とほくに見るやう」で「我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く」「声は聞ゆれど、井の底に物を落したる如き響きに聞なされ」といった描写は、視覚・触覚・聴覚などの身体感覚が外部世界との直接的な手応えを喪って不安定になる統合失調症的な歪みであり、それはまた、一事に偏執的に意固地となる気質、その「三代伝わっての出来そこね」の〈宿縁〉からくる身体反応でもあるのではないか。お力自身もゆえなく源七との関係にこだわり、〈濁り水〉の底に沈んだまま〈心中〉へと傾斜してゆく。そうした状況のお力にとっては、外界の現実も足元の土も耳に届く音も、すべてが〈濁〉った世界と感じられたに違いない。

お力の身体を包むこの〈濁〉った感覚は、むろんタイトルの『にごりえ』に響き合うものだが、明治二七年六月頃の未完成作「狂蝶」の断片[注15]とも照応するものだ。

○此平凡なる我等が目にこそ見えね、世は浅ましく濁りにごりて、上、中、下の差別なく／○世の中にごりに濁りて泥海のごとく万人が万人に対する処置は知らず。

あまり言及されない資料だが、「世の中」を「浅ましく濁りにごりて」や「にごりに濁りて泥海のごとく」と評する表現は、『にごりえ』との深い関連をうかがわせる。そして、お力の〈濁〉った感覚は、「浅ましく濁りににごりて」いる「世の中」に対して誰一人その解決策を見出せない（万人が万人に対する処置は知らず）という現況へのもどかしさにも通じるだろう。眼前の現実社会を「泥海」と見る一葉のまなざしは、最たる「泥海（にごりえ）」の「新開地」に向けられ、その底辺で〈泥水〉を呑む銘酒屋街の女たちに注がれる。なぜなら、「濁りににご」った社会の〈澱（おり）〉は、最下層に吹き寄せられて深く積もり、その〈澱〉を一身に背負う女たちの人生に集約されるからだ。一葉は、そうした現実社会へのもどかしさに、先の見えぬ自身のやるせなさも重ね、絶望的な境涯に沈む銘酒屋の女と男の〈心中〉に向かうしかない〈道行〉に仮託したのではあるまいか。（以下、続稿）

注

（注1）『樋口一葉の世界』（昭53・12平凡社）所収『『にごりえ』の世界』（初出：「立教大学日本文学」昭46・6）。以下の前田論はすべてこれ

による。

（注2）「めざまし草」巻之十五（明30・3）における「概論家」の言及。

（注3）小島烏水「一葉女史」（「文庫」明29・11）

（注4）前田氏は「お力と結城の応答」に『夕鶴』のつうと与ヘうの「言葉のディスコミュニケーション」に通じるアナロジイを見ている。

（注5）（注2）に同じ。

（注6）高田知波・関礼子・満谷マーガレット・宇佐美毅（司会）による座談会。「国文学 解釈と鑑賞」（平7・6　至文堂）

（注7）「『にごりえ』論のために―描かれた酌婦・お力のために―」（「相模国文」18　平3・3）

（注8）「『にごりえ』の〈彼の人〉」（「文学」平6・春　岩波書店）

（注9）山本欣二『樋口一葉　豊饒なる世界へ』（平21・10　和泉書院）第七章「過去を想起するということ―『にごりえ』を読む―」

（注10）滝藤満義「『にごりえ』論」（「横浜国大国語研究」12　平6・3）

（注11）（注6）の対談で、関礼子は「先刻の手紙」を「源七からお力に寄越された手紙」だとし、「『先刻の手紙お出しか』というお高の言葉は『返事をお出しか』の『返事』が省略されている」とする。なお、関氏は先に「『にごりえ』の源七は、お力になんとかして会ってもらおうと『二枚切手の大封じ』の手紙を寄越す」（「一葉と手紙（前）」〈「日本文学」昭和61・3　日文協〉）とも述べており、同感である。

（注12）馬場孤蝶『明治文壇の人々』（昭17・11　三田文学出版部）所収「『にごりえ』の作者」や塩田良平『樋口一葉研究』増補改訂版（昭43・11　中央公論社）は、お力の主なモデルとして一葉宅の隣家「うらしまや」の酌婦小林あいや近所の「鈴木亭」のお留らをあげているが、一葉は銘酒屋の酌婦たちと種々の付き合いがあり、その実態に接していた。なお、お留はお力と同様、もと赤坂に居たと語ったとされる。

（注13）亀井秀雄「非行としての情死」（『感性の変革』昭58・6　講談社）や塚田満江「なぜ水仙にこだわるのか―三度、一葉晩年の小説に寄せて―」（「立命館文学」昭63・10）など。

（注14）二人の出会いは「さる雨の日」で梅雨時と考えると「盂蘭盆」までは約一カ月。

（注15）橋本威『樋口一葉研究』（昭45・9　教育出版センター）所収「『にごりえ』の草稿の検討」が注目し、言及している。

【付記】

拙稿が枚数制限を大きく超えたため、後半の「六」「七」は分載となった。筆者の疎懶のためで、結論のない論など本誌の読者には迷惑な話であり、せめてその概要だけでも略記しておく。

――「六」では、『にごりえ』が〈心中〉をカタストロフとする「道行」の物語を連想させるが、実際には相愛の誓いも死出の旅もなく、近松作品とは似て非なる異形の「道行」である。それは二人の出発が〈愛〉ではなく〈やるせない絶望〉だったことによると論じ、また、未詳の〈心中〉現場について、お力の故意の〈演技〉が源七による刃傷を誘発したとの読みを示した。「七」では、お力が源七との関係を断ってなかった理由や二人の〈心中〉がもつ意味について私見を述べた――。